大阪国語アセンブリー　第6分科会〈対話を含む表現活動〉

さまざまな聞き書きから　……人との対話を作品集に……

岸和田高校　田中　啓介

1　はじめに

・私は今年度、教員生活28年目を迎えている。授業で「聞き書き」を実践したのは、二校目の長吉高校（1994～2001年度の8年間在籍）での授業が初めてだった。教科書を読み進めていくだけの授業ではなかなか興味を示してくれない生徒達と対峙して、どうにかしてこちらを向かせたい、授業を少しでも面白いと感じてもらいたい、そのためには何か工夫が要る、という気持ちからであった。

・2002年度より岸和田高校に勤務している。進学中心の学校であるため、文章を読み解く力や聞いてまとめる力には違いはあるものの、「対話する力」の必要性はそう変わらないものに思える。自分を表現したり、相手の懐に切り込んでいく力はまた異なる部分があると考えるからである。

2　なぜ「聞き書き」なのか

・雑誌や新聞など、高校生が目にする多くの記事は取材によって成り立っており、その作業の中心は相手に「聞き」、それを自ら「書く」ことである。また、ネット上のツイッター・LINE等も、ある意味で新時代の「対話」かもしれない。

・あるテーマをもって「聞き書く」ことは、取材者（生徒本人）の人生において、新たな出会いを作ったり、相手の思わぬ一面を見い出したりして、何らかの参考になる可能性がある。また、「自分は何に関心がある？」「どの人に聞きたい？」と、自分内部の問題意識を問い直すきっかけにもつながる。

・「対話」や「聞き書き」は、実に難しい作業である。人の話を「聞く」ために「話し」、聞いたことを記事に「書き」、そして出来上がったものを「読む」。国語の主たる要素が総合的に融合されている。

・友人との他愛ないおしゃべりは得意でも、公の場での表現は苦手だという生徒は多い。「聞き書き」は私的ではなく、公的な性格をもっている。「聞き書き」の難しさを痛感するのもいい勉強になるはずだ。

・取材ゆえに、聞きながらメモをとることが求められる（録音機も使用も勧めてはいるが、ほとんど利用されない）。その後の授業に習慣づけできれば有効であろう。　→　余談だが、「授業記録」という授業の当番制度を20年以上続けている。

・記事にまとめる作業にも、さまざまな工夫が必要となる。

　①記事にする取捨選択の難しさ（新聞等の記事では、取材して記事になるのはごくわずかの分量）

　②まとめ方（語り口調）の工夫　……　a　一問一答形式　　b　独白形式　　c　記事＋語り挿入形式　など

　③レイアウトの工夫　……　記事の見やすさ、イラスト・写真の活用、見出しの工夫　など

・作品集にすることで、一つの達成感を得る。また、他人の書いた記事を読み、鑑賞したり相互批評することが可能。形に残すことには大きな意味がある。

3　具体的実践の紹介（時系列で並べます）

【　長吉高校　】

①先生の青春時代「17歳のころ」……1999年度「総合国語」（2年生対象の選択授業）　→　**資料3**

・当時出版された『二十歳のころ』（立花隆＋東京大学教養学部立花ゼミ／新潮社）を参考にさせてもらった。

・一学期の約20時間を「聞き書き」中心に充てられたので、いろんな雑談や予備作業を行うことができた。

・表紙をカラーコピー紙にし、製本テープも配布することで冊子の見栄えが違うと実感する。

②先生たちの青春のとき「私の高校時代」……2001年度「暮らしの国語」（2年生対象の選択授業）　→　**資料4**

・一学期の後半のみで行ったため、①の時よりもかけた時数は少ない。

・基本的には一年前の経験を踏襲した。